

# 大学進学動機にみる北九州市立大学の新入生の特徴

西出 崇\*・山崎 芙美子\*\*・浅羽 修丈

## 1. はじめに

平成20年以降、高校から大学・短期大学への進学率は50%を超えている（学校基本調査、2014）。マーティン・トロウ（1976）によれば、1950年代までは進学率15%未満のエリート段階、すなわち支配階級養成が大学の役割であり、1960年代以降では進学率50%未満のマス段階、すなわち専門分化したエリート養成が大学の役割であったが、現代では進学率50%以上のユニバーサル段階、すなわち2人に1人が大学に進学することから「大卒」がステータスとなることのない大学教育一般化の時代へと移行している。

大学におけるユニバーサル化の影響は、大学教育の在り方に大きく影響を与えることとなる。古市（1993）が、近年の大学生における学業態度や姿勢が多様化していることについて危惧しているように、進学率が上昇することは進学動機が多様化につながると考えられる。例えば、測上（1984）は、専門知識の取得や自分の可能性を求めることを動機とした「大学の本来的機能」、周りの勧めが動機となる「家族への配慮と規範機能」、周りの人が進学していることやまだ社会に出たくないことが動機となる「モラトリアム機能」、大学で多くの人に知り合うことや課外活動への参加を動機とした「大学の副次的機能」、将来的に裕福な生活を送ることや一流企業へ就職することが動機となる「大学の経済価値機能」などが大学進学動機として存在することを報告している。また古市（1993）は、目的自体が存在しないことや友達への同調が動機となる「無目的・同調」、大学での課外活動への参加や異性と交流することが動機となる「享楽志向」、その大学に学びたい学問領域があることが動機となる「勉強志向」、大学に進学することによって得られる資格や就職

---

\* 北九州市立大学 グローバル人材育成推進室

\*\* 北九州市立大学 大学教育再生加速プログラム推進室

先への影響を動機とした「資格・就職志向」などを挙げている。以上のように、大学での専門的な学び以外の動機が複数明らかにされている。

北九州市立大学においても、ユニバーサル化の影響を例外なく受けており、多様な大学進学動機を持つ学生が入学してきていると考えられる。しかし、これまでどのような大学進学動機を持つ学生が本学を志望して入学しているかを検討した報告はない。大学進学動機は、大学特性や設置されている学部・学科、性別によっても変化することが報告されていることから（古市、1993；齊藤・内田、2002）、本学の特徴を明らかにするうえでも大学進学動機を把握することは有益であるといえる。そこで本研究は、主に古市（1993）の研究を下敷きにしなが、北九州市立大学の新生を対象に大学進学動機を調査し、学部・学科や性別による違いによって差が見られるかを検証した。

なお本研究では、北九州市立大学の現状、および学部・学科間の相対的な特徴を定量的に明らかにするとともに、教育のあり方や方針を検討するうえで参考となる基礎的資料を提供することも目的としている。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象と実施方法

調査は、北九州市立大学における 2015 年度の新生のうち、北方キャンパスの 4 学部・1 学群（以下、学部とする）の 9 学科・1 学類（以下、学科とする）に所属する 1168 名を対象に実施した。調査方法は、入学式後に行われる各種オリエンテーション日程のうち、ほぼ全ての 1 年生が集まる 4 月 7 日の「グローバル人材育成プログラム」のガイダンスにおいて、A4 用紙両面のマークシート式調査票を配布し、その場で回答してもらい終了後に直ちに回収した。調査の目的そのものはグローバル人材育成プログラムに関するものであるが、学生の大学生活一般に対する態度を測定することを目的に入学動機についての項目を設けており、ここではこの項目のみを取り出して分析を行う。したがって、資料としては副次的に得られたものである。各学部・学科の学生数と有効回答数については表 1 に整理した。全体では約 80% の 930 件の有効回答があり分析のためには十分であるが、学科によっては一部に回答者数が少ないところがあり、学科間比較の際には注意を要する。

【表 1】学生数と有効回答数

	有効回答数			有効回答率			学生数		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
外国語学部									
英米学科	28	68	96	70.0%	87.2%	81.4%	40	78	118
中国学科	9	30	39	50.0%	73.2%	66.1%	18	41	59
国際関係学科	23	61	84	74.2%	92.4%	86.6%	31	66	97
経済学部									
経済学科	70	49	119	79.5%	84.5%	81.5%	88	58	146
経営情報学科	51	58	109	69.9%	76.3%	73.2%	73	76	149
文学部									
比較文化学科	16	114	130	66.7%	91.2%	87.2%	24	125	149
人間関係学科	23	57	80	82.1%	91.9%	88.9%	28	62	90
法学部									
法律学科	67	69	136	69.1%	79.3%	73.9%	97	87	184
政策科学科	37	24	61	77.1%	72.7%	75.3%	48	33	81
地域創生学群									
地域創生学類	22	54	76	68.8%	85.7%	80.0%	32	63	95
合計	346	584	930	72.2%	84.8%	79.6%	479	689	1168

※ここでの有効回答数とは因子分析が可能であった回答者数である。ただし所属が不明な回答は因子分析には用いたがその後の分析からは除外した

## 2-2. 質問内容

大学への進学動機をたずねる質問は、古市（1993）が提案した項目をほぼそのまま利用した<sup>1</sup>。各項目の選択肢については、本研究も古市と同様に5件尺度を用いているが、古市が「非常によくあてはまる」「かなりよくあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」としているのに対して、ここでは「どちらともいえない」を中央にして「あてはまる」と「あてはまらない」を両端に置き、「あてはまる」「あてはまらない」と「どちらともいえない」

<sup>1</sup> 質問の中で文言がわかりにくい点について若干の修正を行った。また古市が提案した25項目のうち、「結婚に有利だから」という項目については質問票作成の作業上の手違いから、本調査には含まれていない。ただし、昨今の晩婚化と進学率の上昇などを考え合わせれば、入学動機としてさほど重要な項目とは考えにくいいため、分析の全体像には影響しないと考ええる。

との中間に選択肢を設ける形とした<sup>2</sup>。なお、この入学動機をたずねる質問は調査票の最後に配置され、前にはグローバル人材育成に関する質問項目がある。

### 3. 大学進学動機の因子構造と各因子の内容

大学進学動機の項目について、本研究においても前掲の古市と同様に因子分析を適用し、その構造を検討した<sup>3</sup>。ここでの因子分析は、因子抽出方法として最小二乗法を用い、因子回転にはプロマックス法を用いた<sup>4</sup>。なお因子数については、古市(1993)は4因子構造を採用しているが、本研究ではカイザー・ガットマン基準にしたがって固有値が1以上のものを因子として採用し、6因子構造とした。このようにして得られた分析結果を表2に示す。

分析結果について、まず析出されたそれぞれの因子の内容について解釈を試みる。第1因子では、「専門知識・専門技術の習得」「学問研究」「希望職業に就く」「やりたいことができる」といった項目で因子負荷の値が高い。「やりたいこと」として専門知識の修得や学問研究を捉えており、それを希望する職業への就職と結びつけて大学への進学を捉えていると考えられる。そこで、第1因子は「学問・専門領域志向」と名付けておく。ところで、古市の分析ではこれらの項目は「勉学志向」という因子に対しての因子負荷が高いが、この因子の内容は概ね本研究における第1因子に第5因子の項目を合わせたものとなっている。本研究の分析において、第1因子と第5因子との間には比較的強い因子間相関が見られることを考慮すれば、ここでの両因子は古市における「勉学志向」が分化したものだと考えてもよいだろう。

第1因子との関係から、次に第5因子について解釈を行う。第5因子では、「広

<sup>2</sup> 古市の調査との厳密な比較を目的としているわけではないため、選択肢の与え方の違いはさほど大きな問題ではないと考える。ここでは両端の選択肢の表現がやや強すぎると判断し、「かなり」や「まったく」といった表現を選択肢の文言から削除した。

<sup>3</sup> 因子分析に先立って次のようなデータ処理を行った。心理測定尺度は質問項目が多くなる傾向があり、全ての項目について真剣に回答されない場合がある。このような回答を全て取り除くことは難しいが、全ての項目について同じ選択肢を選択することはありえないと考えられるため、このような回答については無効な回答とみなして分析から除外した。また、大学進学動機の項目のうち、回答がなされていない項目については補完などの処置は行っていないため、1項目でも無回答がある回答者についても分析から除外した。

<sup>4</sup> 最尤法、一般化最小二乗法でも検討して、ここでの分析と概ね同様の因子構造を得たが、解釈のしやすさから最小二乗法を採用した。いずれの場合でも回転法はプロマックス回転を用いた。

【表 2】 大学進学動機項目の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
u. 専門的知識を修得したいから	<b>0.761</b>	-0.138	0.107	-0.095	0.183	-0.086
v. 専門的技術を身につけたいから	<b>0.692</b>	-0.074	0.150	-0.096	0.152	-0.007
p. 学問研究をしたいから	<b>0.659</b>	-0.021	0.095	-0.074	-0.039	-0.019
o. 希望する職業に就きたいから	<b>0.561</b>	0.061	-0.203	0.260	-0.211	0.009
x. やりたいことができるから	<b>0.413</b>	0.171	-0.163	0.072	0.142	-0.045
c. クラブ・サークルに加入したいから	-0.053	<b>0.814</b>	-0.147	-0.130	0.026	0.099
b. 開放感を味わいたいから	-0.010	<b>0.752</b>	0.063	-0.091	-0.077	0.031
t. 大学で遊びたいから	-0.112	<b>0.615</b>	0.230	0.100	0.073	-0.143
q. 異性の友人をみつけないから	0.058	<b>0.529</b>	0.176	-0.017	0.030	0.001
l. 大学への憧れから	0.021	0.369	0.006	0.264	0.173	0.039
a. 資格を取得したいから	0.245	0.279	-0.156	0.028	-0.077	0.205
e. なんとなく	-0.110	-0.017	<b>0.725</b>	0.014	-0.064	-0.007
f. 周囲の人が進学するから	-0.097	-0.101	<b>0.708</b>	0.078	0.073	0.155
i. 社会にまだ出たくないから	0.100	0.110	<b>0.633</b>	0.015	-0.181	0.049
j. 見栄があるから	0.211	0.138	<b>0.578</b>	0.023	-0.123	0.116
m. 大学に入るほうが就職に有利だから	-0.130	-0.063	-0.096	<b>0.820</b>	0.069	0.048
w. 学歴社会だから	0.105	-0.072	0.168	<b>0.643</b>	0.070	-0.036
n. 高卒が嫌だったから	0.019	-0.025	0.214	<b>0.567</b>	-0.089	-0.058
k. 視野を広げたいから	0.128	-0.106	-0.166	0.050	<b>0.556</b>	0.154
r. 多くの人と知り合いたいから	-0.056	0.339	-0.062	0.048	<b>0.550</b>	-0.079
s. 個性を磨きたいから	0.206	0.231	0.065	-0.034	<b>0.449</b>	-0.049
d. 広く教養を身につけたいから	0.292	-0.089	-0.124	0.011	<b>0.415</b>	0.107
g. 先生の助言があったから	-0.062	0.012	0.256	-0.026	0.132	<b>0.639</b>
h. 家族が勧めたから	-0.015	0.040	0.280	0.013	0.025	<b>0.590</b>
因子間相関						
第 1 因子	-	0.206	-0.236	0.216	0.470	0.011
第 2 因子	0.206	-	0.438	0.511	0.379	0.182
第 3 因子	-0.236	0.438	-	0.406	-0.002	0.342
第 4 因子	0.216	0.511	0.406	-	0.245	0.266
第 5 因子	0.470	0.379	-0.002	0.245	-	-0.064
第 6 因子	0.011	0.182	0.342	0.266	-0.064	-

※最小二乗法・プロマックス回転によるパターン行列と因子間相関

※因子負荷が0.400以上を強調

※各因子の因子負荷が0.400以上の項目でクロンバックの $\alpha$ 係数を求めると第1因子から順に0.786、0.799、0.831、0.712、0.723、0.771となる

い教養」「視野の広がり」「個性を磨く」「多くの人との出会い」といった項目で負荷量が高い。前二者は、第1因子にみられた専門性とは違い、幅広い教養と視野への志向である。これらと個性を磨き、多くの人と出会いたいという志向が1つの因子を構成している。これらは、大学への進学動機として明確な学問や専門性を目指すものではないが、教養を身につけ個性を磨くなど漠然とはしているが何かを学び取ろうとする志向が感じられる。その意味では第1因子と近いが、大学で学ぶ意欲の方向がやや一般的、抽象的であるといえる。このようなことから、ここでは第5因子を「自己研鑽志向」と名付ける。

続いて第2因子について検討する。この因子では、「クラブやサークルへの加入」「遊びたい」「開放感」「異性との出会い」といった項目の負荷量が高い。第1因子との対比でいえば、大学生活における課外活動に重きを置いているように見えることから、ここではこの因子を「課外活動志向」と名付ける。これは、古市の分析における「享楽志向」とほぼ同じ内容だと考えてよいだろう。

第3因子は、大学への進学動機としてはかなり消極的な「なんとなく」「周囲の人が進学するため」「社会に出たくない」「見栄」といった項目の負荷量が高い。進学率が高まっている今日では大半の人が大学に進学するため、大学での勉学や課外での活動に特段の関心はないが、まだ働きたくはないし、周りの人々に同調して無目的に進学したことがうかがえる。そこで、ここでは第3因子を「無目的・同調」と名付ける。第4因子は、「就職に有利」「学歴社会だから」「高卒が嫌」といった項目で負荷量が高い。これらは、大学での勉学そのものや課外活動などよりも、大学を卒業することそのものに自分の将来への価値を見出しているといえる。すなわち、学歴というものに価値をおいて大学に進学していると考えられることから、この因子については「学歴志向」と名付ける。

第2因子から第4因子までの3つの因子の因子間相関は、それぞれ比較的高い値を示している。このことから、これらの志向は相互に重なり合ったものであることがうかがえる。本来的には大学が学問や専門知識を学ぶ場であると考えられるならば、第2因子から第4因子までの3つの因子は、どちらかといえばそのような目的とは異なる進学動機であるといえる。これらの3因子の相関の高さは、因子として分化しているが、勉学以外の大学への進学動機として関連付けてとらえることができるかもしれない。いずれにしても、これらの因子間相関の情報は因子の解釈とその後の分析において、念頭に置いておくことが望ましいだろう。

最後に第6因子について検討する。この因子に対して因子負荷が大きいのは「教員の助言」「家族の勧め」の2項目で、そのまま「周囲の勧め」とすればよいだろう。これらは古市の分析では、「無目的・同調」という因子への因子負荷が高い。因子間相関をみると、本研究における第3因子「無目的・同調」との因子間相関が最も高いことから古市の分析とは大きく矛盾しているわけではないが、他の因子間相関と比べればさほど相関が強いわけではなく、同じ因子にまともるほどの関係ではないということだろう。

以上のように、ここでは古市の解釈を参照しつつ、6因子構造として各因子の解釈を行った。先行研究とは因子抽出法や回転法、採用している因子の数などが異なるものの、総じて見れば内容的には矛盾のない因子構造を見出すことができたと考える。このことは、古市が提案した大学進学動機の尺度に一定の有効性を認めることができるということを示している。

#### 4. 大学進学動機にみる学科の相対的特徴

大学進学動機の構造が明らかになったところで、次に析出された6つの進学動機の因子から北九州市立大学の各学科の特徴を検討する。進学動機のそれぞれの因子の分布状況を学科間で比較することで、大学への進学動機という側面から各学科の学生の特徴を捉えることができるだろう。具体的には、それぞれの因子における因子得点の平均を学科間で比較することで、各学科の特徴について検討していく<sup>5</sup>。ただしここで議論するのは、あくまでも学科間比較における相対的な特徴であることは、結果の解釈において常に念頭に置かなければならない。

分析から得られた各因子の因子得点の分布を学科間で比較するために、まず一般線形モデル (GLM) を用い、それぞれの因子の因子得点平均に対する学科、性別および両者の交互作用の影響について検討する<sup>6</sup>。加えて、図1から図6に学科および性別ごとの因子得点の平均値をプロットする。ここでは、これらの分析結果と図から学科の特徴を概観しつつ、紙幅の都合で詳細な結果は省略するが、必要に応じ

<sup>5</sup> 因子負荷の高い項目のみを用いて因子ごとに尺度得点を計算する方法もあるが、ここでは因子分析の結果から得られる因子得点を用いた。

<sup>6</sup> 分散分析、共分散分析、線形回帰などの分析方法は、一般線形モデルの範疇に含まれる。ここでは分散分析を中心に検討するが、各説明変数の影響の検討には回帰係数も参照する。

て各説明変数の回帰係数とその検定結果を用いて考察をすすめる<sup>7</sup>。なお、考察にあたっては表1に示すように、学科と性別の組み合わせによっては学生数（有効回答数）がかなり少ない場合もあるため、図から学科間の差を読み取る際には注意しなければならない。学部の特徴を検討していく以降の作業では、学科ごとに特徴を詳細に把握するよりも全体像を把握することに力を置く。したがって、個々の学科間を個別に比較することはせず、平均的な特徴から乖離した学科を中心に言及していく。

はじめに表3の分散分析表から、学科と性別および両者の交互作用の効果について概観する。学科についてみると、第5因子以外の因子は5%水準で有意であり、第5因子についても10%水準で有意な影響が確認できることから、いずれの因子についても、学科間に差がみられるといえる。詳細は後に検討するが、大学への進学動機という側面からみると、相対的なものではあるが、学科によって入学してくる学生の「キャラクター」は異なっているようである。性別についてみると、3つの因子で有意な差が認められることから、大学への進学動機には性別によって異なる面もみられるようである。学科と性別の交互作用についてみると、ほとんどの因子で有意な影響は見られないが、第1因子についてのみ10%水準で有意な影響が確認できる。したがって、第1因子以外では基本的に学科に特有の性別による差はないと考えることができるだろう。以上を踏まえて、次に因子ごとに学科および性別について詳しくみていく。

各因子における学科および性別による差の検討には、それぞれの変数の回帰係数の値を参照する。分散分析において交互作用の有無を確認したが、第1因子以外では交互作用項は不要であると判断し、第1因子以外の分析では、交互作用項を取り除いた学科と性別の主効果のみのモデルに更新したうえで回帰係数を検討する。また、分析においては学科および性別はダミー変数としてモデルに投入しており、学科における基準カテゴリは法律学科としている。法律学科を基準としたのは、総じ

---

<sup>7</sup> 分散分析によって検出した説明変数の影響について各変数の水準ごとの差に踏み込んで分析する方法として多重比較も考えられるが、煩雑になるためここでは各水準の回帰係数から検討する。回帰係数は、学科および性別をダミー変数として投入した際の値であるため、基準カテゴリに対する差を検討していることになる。学科間に差があるかをそれぞれ検討するためには多重比較が必要であるが、ここでは学科間の差を詳細に分析することが目的ではなく、全体として相対的な学科の特徴を把握することを目的としているため、多重比較による学科間の詳細な検討までは踏み込まない。



てみれば各因子の因子得点平均が全体の平均に近く、学科全体の中間的な特徴があると考えられるためである。

【表 3】 学科および性別を説明変数とした因子得点平均の分散分析表

第1因子 学問・専門領域志向				第2因子 課外活動志向			
	SS	Df	F		SS	Df	F
(Intercept)	0.400	1	0.509	(Intercept)	0.010	1	0.010
学科	42.010	9	5.994 ***	学科	24.450	9	3.280 ***
性別	1.860	1	2.384	性別	5.280	1	6.369 **
学科×性別	11.820	9	1.687 *	学科×性別	3.740	9	0.502
残差	708.540	910		残差	753.690	910	

第3因子 無目的・同調				第4因子 学歴志向			
	SS	Df	F		SS	Df	F
(Intercept)	0.010	1	0.015	(Intercept)	0.000	1	0.005
学科	46.680	9	6.520 ***	学科	14.580	9	2.059 **
性別	3.890	1	4.890 **	性別	0.210	1	0.261
学科×性別	7.450	9	1.040	学科×性別	2.880	9	0.407
残差	723.880	910		残差	715.640	910	

第5因子 自己研鑽志向				第6因子 周囲の勧め			
	SS	Df	F		SS	Df	F
(Intercept)	0.170	1	0.237	(Intercept)	0.170	1	0.246
学科	11.320	9	1.722 *	学科	17.950	9	2.954 ***
性別	4.410	1	6.043 **	性別	0.020	1	0.034
学科×性別	5.620	9	0.855	学科×性別	1.160	9	0.191
残差	664.740	910		残差	614.360	910	

※平方和の計算には Type III 平方和を用いた  
 \*\*\*: p<0.01, \*\*: p<0.05, \*: p<0.10

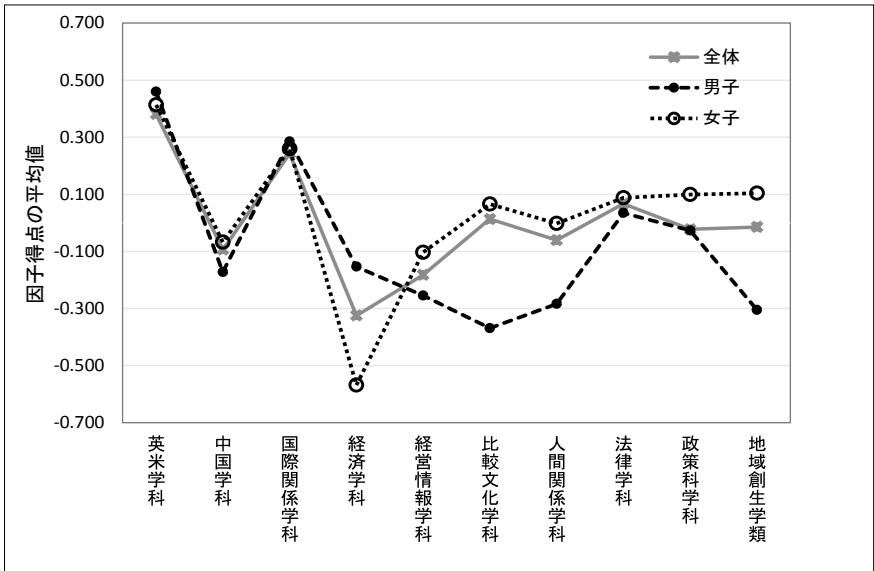
第1因子の「学問・専門領域志向」では、学科による差はあるが主効果として性差は認められないものの、両者の交互作用はあるようである。図1をみると、英米学科ではこの志向が高く、経済学科では相対的に低いようである。回帰係数をみると、法律学科を基準として英米学科は有意に平均が高く、経済学科は低いことがわかる。それ以外の学科には有意な差がみられないことから、これらの学科の因子得点平均は英米学科と経済学科との中間的な水準にあるとみられる。個別の学科間で比較すれば差がみられるところもあるだろうが、ここではそこまで踏み込まない。

この因子では、性別による主効果は認められないが、交互作用が有意になっていることから学科ごとに性別を検討する必要がある。図から概観すると、経済学科や比較文化学科、人間関係学科、地域創生学類で男女間の差があるようにみえるが、回帰係数の検定では経済学科の係数だけが有意である。経済学科の女性は、学問・専門領域志向が相対的に弱いことがうかがえる。比較文化学科や人間関係学科、地域創生学類で有意な関係が見いだせないのは、これらの学科では男性の学生数が少ないため統計的な検討のためには十分な回答数が得られなかったことが関係していると考えられる。そのうえで学科の特性やそこからくる学生の男女比などを考えてみると、やはりこれらの学科では学問・専門領域志向の因子のあり方には性差があると思われる。一般化して考えるかどうかはともかく、これらの学科での性別による差には注意を払う必要があるかもしれない。

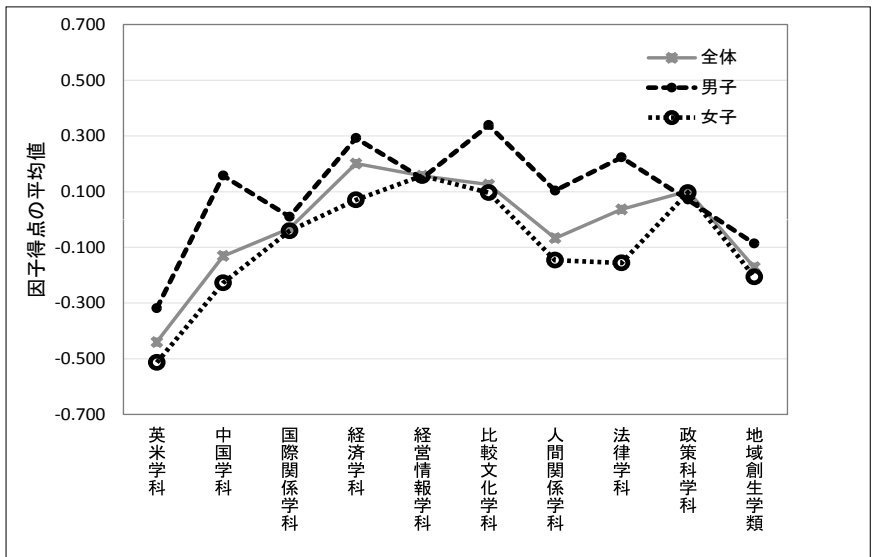
第2因子の「課外活動志向」は、学科および性別で差がみられる。各学科の回帰係数をみると、英米学科において1%水準で有意に低いのみで、他の学科は基準となる法律学科との差は認められない。英米学科の学生は、第1因子の「学問・専門領域志向」が強い半面で、この第2因子の「課外活動志向」は相対的に低いようである。英米学科の学生における大学進学動機の特徴の一端がうかがえる。性別については、図からわかるように男性の平均が高い。

第3因子の「無目的・同調」因子の因子得点でも、学科と性別で平均に差がみられる。学科ごとの回帰係数についてみると、英米学科、国際関係学科では1%水準で、地域創生学類では5%水準で有意に因子得点が低く、経済学科では10%水準で有意に因子得点が高いことが確認できる。それ以外の学科は、基準の法律学科と有意な差は認められない。性別についてみると、図からは男女間に大きな差がみられるほどではないが、やはり男性の方が因子得点の平均は高いようである。

大学進学動機にみる北九州市立大学の新生の特徴



【図1】第1因子「学問・専門領域志向」の学科・性別ごとの因子得点平均

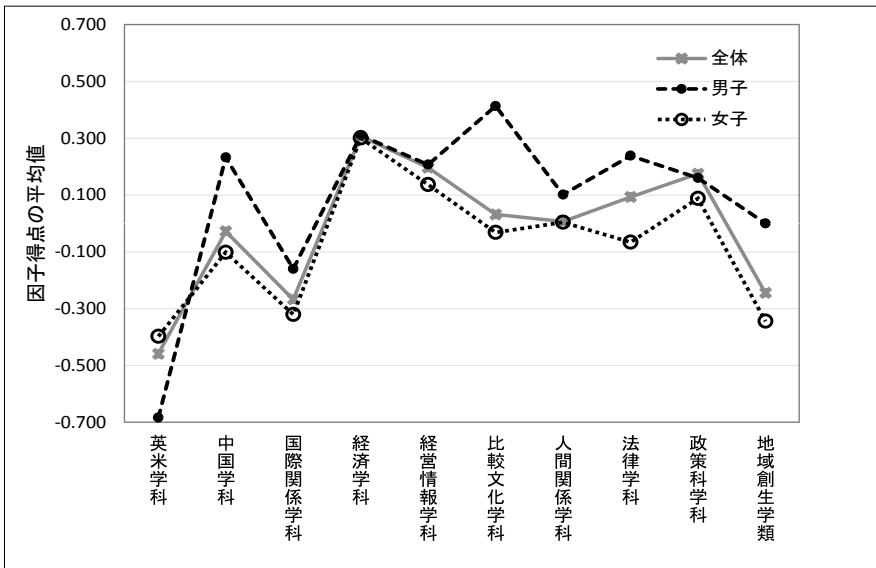


【図2】第2因子「課外活動志向」の学科・性別ごとの因子得点平均

第4因子の「学歴志向」は、性別での差は認められないが、学科による差は確認できる。図4でも、どの学科も男女の値がほぼ同じ水準にあることがわかる。学科による差についても、総じて見ればさほど大きな差はないように見える。各学科の回帰係数の検定結果を確認すると、経済学科においてのみ5%水準で有意に平均が高いことが確認できるが、それ以外の学科は基準に対して差はない。

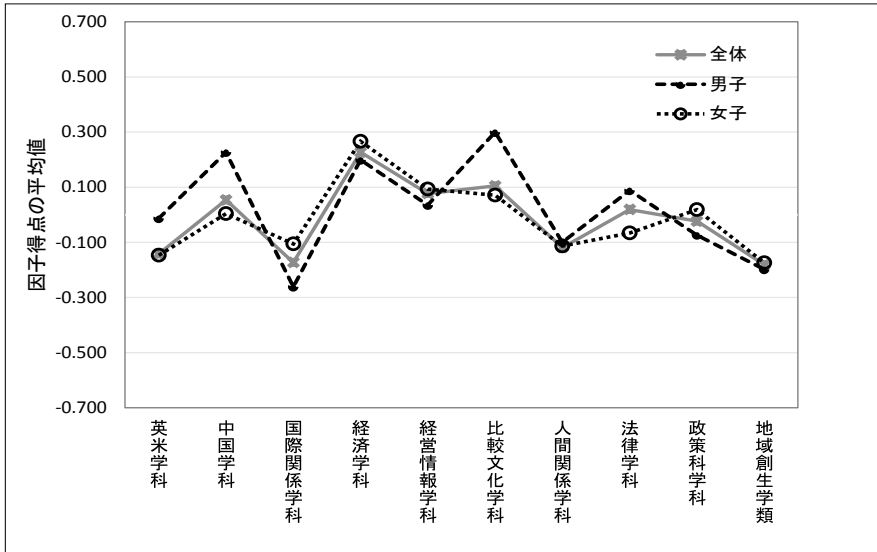
第5因子の「自己研鑽志向」では、学科および性別のいずれにも差がみられる。この因子では、英米学科、国際関係学科、比較文化学科、地域創生学類が5%水準で有意に因子得点平均が高い。ただし、基準となる法律学科の因子得点平均の水準が他と比較してやや低いため注意が必要である。この点を踏まえて図5をみると、総じて学科間に大きな差はないようである。性別については、女性の方が因子得点の平均が高い。

第6因子の「周囲の勧め」では、性別では差が無く学科のみ差がみられる。図6を概観するかぎり、全体として学科間にさほど大きな差はないように見えるが、英米学科と国際関係学科においては有意に因子得点が低いことが認められる。

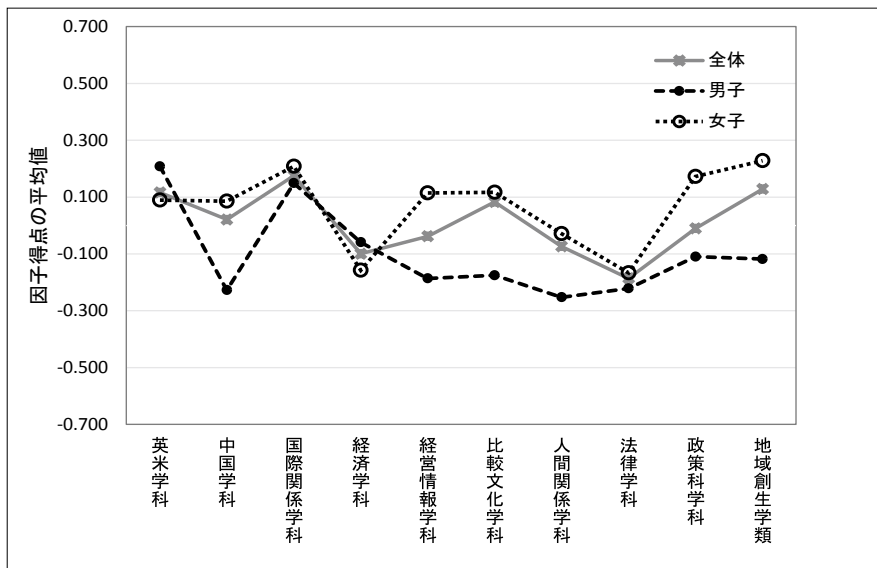


【図3】第3因子「無目的・同調」の学科・性別ごとの因子得点平均

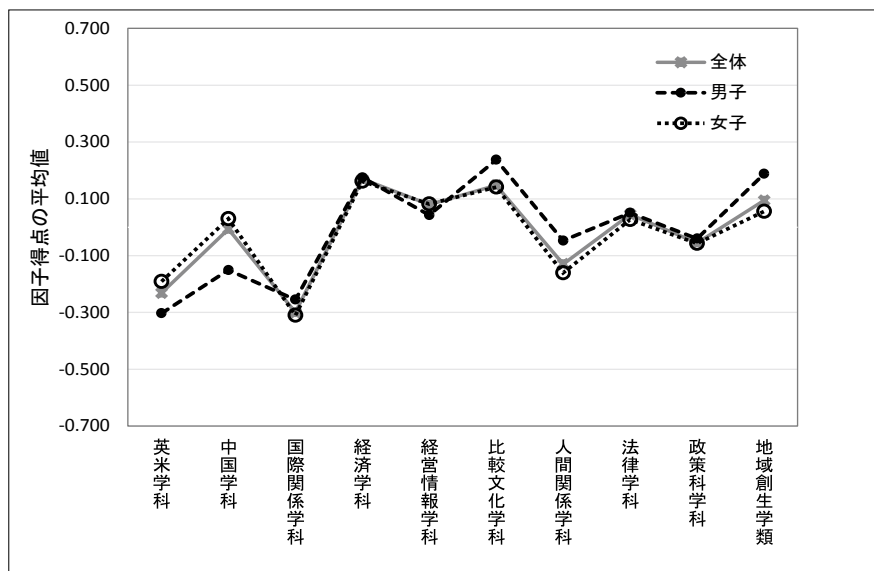
大学進学動機にみる北九州市立大学の新生の特徴



【図4】第4因子「学歴志向」の学科・性別ごとの因子得点平均



【図5】第5因子「自己研鑽志向」の学科・性別ごとの因子得点平均



【図6】第6因子「周囲の勧め」の学科・性別ごとの因子得点平均

これまでに見たそれぞれの因子の因子得点の学科ごとの分布状況を踏まえて、北九州市立大学において特徴的な学科について検討する。ここでは、いずれの因子においても概ね平均的な因子得点の水準にある法律学科を基準に比較を行ってきたが、ここで目立った特徴がみられた学科が英米学科である。英米学科は、第1因子「学問・専門領域志向」の因子得点が高く、第2因子「課外活動志向」や第3因子「無目的・同調」、および第6因子「周囲の勧め」の因子得点が低い。ここから見えてくるのは、明確な勉学への志向である。大学を学業の場として捉えるならば、進学動機という面では相対的に「良い」学生が英米学科には多いといえるかもしれない。このような特徴は国際関係学科にもある程度見られるが、第2因子「課外活動志向」の水準は、やや異なっているようである。

これに対して、第1因子「学問・専門領域志向」の水準が低いのが経済学科で、とりわけ女性の因子得点が低い。その半面で、第2因子「課外活動志向」や第3因子「無目的・同調」の水準が高いことも特徴として指摘できる。また他方では、第4因子「学歴志向」の高さもうかがえる。経済学科については、進学動機として学業的な関心が相対的に低い一方で、課外での活動を重視する傾向があるようであ

る。しかし、大学に行かないという進路の選択肢はもっておらず、「学歴」や「就職」のために大学に進学している、という進学動機の特徴がうかがえる。学ぶ目的が明確になっていない中で、ただ無目的であるわけではなく就職など将来のことを考えて、実利的な学問として「経済学」が捉えられた結果、経済学科が進学先として選ばれたということかもしれない。

この他に何らかの特徴がみられる学科として、地域創生学類が挙げられる。地域創生学類は、全体としてみれば平均的な特徴をもつ法律学科と大きな差がみられるわけではないが、第3因子「無目的・同調」の得点が有意に低い。だが、英米学科などのようにその半面で第1因子「学問・専門領域志向」が高いわけではないし、第2因子「課外活動志向」が顕著に高いということもない。地域創生学類は、他学科と比べると学びの内容や方向性が異なっており、進学動機のあり方もやや異なっていることも考えられる。だとすれば、ここでの調査項目の範囲ではとらえられない何らかの進学動機がある可能性もある。少なくとも、無目的で周囲同調的になんとか進学したわけではないことは確かである。より踏み込んだ分析のためには、新たな尺度の開発が必要となるかもしれない。

図からもわかるように、これら以外の学科についても詳細に検討をすすめれば学科ごとに特徴が見えてくるはずである。しかし、本研究では学科間の相対的な特徴を全体像として把握することを目的としているため、これ以上個別に言及はしない。総じていえば、入学動機という点からみれば、これらの学科は北九州市立大学の平均的な状況に近いと考えられる。

男女の差についてみると、相対的に女性の方がより積極的な動機をもって大学に進学しているようである。第1因子「学問・専門領域志向」や第5因子「自己研鑽志向」など、大学で何かを学ぼうとする姿勢に関する因子の因子得点は女性の方が高い水準にあるし、第2因子「課外活動志向」や第3因子「無目的・同調」の水準は低い。性別による差は、図からみる限りでは学科によって異なっているところもあるが、交互作用が確認できるほどの特徴ではないようである。また、学科を統制したうえでこれらの因子に性差が有意に影響していることを考えれば、男女で大学への進学動機のあり方はいくつかの点で異なっているといえる。

## 5. まとめ

冒頭で述べたように、高等教育が「ユニバーサル化」したことに伴って、学問の探求や専門知識の獲得といった大学の「あるべき役割」に対応した目的だけではなく、それ以外の多様な目的をもった学生が増加していることは周知の事実である。本研究でも、この大学の本来の役割に対応した進学動機といえる第1因子「学問・専門領域志向」に対して、同一軸上に課外活動への志向などが位置するのではなく、別の因子として析出されたことから、北九州市立大学においても例外なく勉学以外に多様な進学目的をもつ学生が入学してきていることがうかがえる。このような現象に対して、大学がどのような場であるべきなのかは常に議論的となっているし、それは大学の社会的役割の問題でもある。この点については本稿の範疇を超えるためこれ以上言及できないが、大学に「何か」を求めて進学してくる学生の志向が学問以外にも広がりを見せていることは事実であり、今後の大学教育のあり方や社会的役割を考える際には何らかの形で受け止めざるをえない問題だということは確かである。

本稿では学生の多様化した進学動機が学科間で相対的に異なることを示した。この違いを、大学全体および学部・学科としてどのように受け止めるべきであるのかは、大学のあり方そのものについての議論と重なる大きな問題であり本稿の射程を超えることを意識しつつ、ここでは今後の教育のあり方を考える資料としてどのように考慮しうるのであるのか、若干の言及を加えておきたい。

例えば、ここでは英米学科の「学問・専門領域志向」因子の得点が高く、他方で「課外活動志向」因子などの得点が低いことを特徴として示した。これはまさに、大学への進学動機として本来あるべき姿であるといえるかもしれない。しかし、この調査が入学直後に行われたものであることを考えれば、手放しで評価することには慎重であるべきだろう。高い志と期待を持った学生が、実際に入学してみると理想や期待とは異なり、そのギャップに失望するというのはしばしば耳にする。この学科の勉学的な志向の強さは、裏を返せば彼らの期待に十分に答える教育内容を提供できなければ、失望も相対的に大きなものになることを示唆する。これに対して、学問探求の面白さを学生に伝えるには一定の時間がかかるとすれば、むしろ期待の高さがそこに至るまでの障害となるかもしれない。

他方で英米学科とは異なる特徴を示す経済学科では、どのような見方ができるだ



ろうか。この学科は「学問・専門領域志向」因子の因子得点が低く、「課外活動志向」「無目的・同調」「学歴志向」などで得点が高い。一見すると勉学的な志向が相対的に低く、社会にはまだ出たくないが大学卒業の学歴が欲しいがために周囲に同調的に大学に入学したという、ある種の理想的な学生の姿からすれば消極的な志向がうかがえる。入学動機として、こうした態度は必ずしも褒められたものではないことは確かであるが、このような学生の態度が可視化されたことで導入教育のあり方や対応も見えてくるかもしれない。例えば、「学歴志向」に因子負荷が高い項目として「大学に入る方が就職に有利だから」がある。彼らは、ただ大学に進学できればよいと考えているのではなく、数ある学問領域の中で「経済学」を選択している。それは、もしかすると「就職に有利」ということと関係しているのかもしれない。だとすれば、将来の就職と経済学科の教育内容をうまく結び付けて彼らに示すことができれば、専門領域への学習意欲や動機を喚起することができる可能性もあるだろう。

このような英米学科と経済学科を例とした考察は、やや過大な懸念であったり楽観的に過ぎる期待だといえるかもしれない。また、いずれの学科の特徴もあくまでも相対的なものであり、実質的な学生の態度としてどの程度の差があるのかも明らかではない。しかし、高等教育がユニバーサル化し多様な目的を持つ学生が大学に進学するようになるなかで、より実のある大学教育を展開しようとするならば、こうした学生の大学というものに対する基本的な態度を把握しておくことは、大学が今後どのような方向に進むとしても重要であることは間違いない。

ここで明らかになった事実は、入学時における進学理由という学生の態度の一断面である。英米学科の例でも言及したように、時間の経過とともに期待と現実のギャップが顕在化し学習態度が変化していくことも十分考えられるし、教育改善などを進めるためには他にも調査すべき事項は存在する。ここで用いたデータは、あくまでも副次的に得られたものであるが、学生の大学における基本的な態度を把握することに一定の意義を見出すことができたといえる。大学のあり方を議論するための基礎資料として、このような調査は有用である。したがって、調査の企画と設計をブラッシュアップしたうえで、今後も体系的かつ継続的にこうした調査を実施していくことが望まれる。そうすることで、今後の議論に資する材料を蓄積することができるだろう。

## 参考文献

- 斉藤浩一・内田治（2002）「大学志望動機の学科間格差に関する統計的検討」『東京情報大学研究論集』東京情報大学、6（2）、pp.89-97。
- 測上克義（1984）「進学志望の意思決定過程に関する研究」『教育心理学研究』日本教育心理学会、32（1）、pp.59-63。
- 古市裕一（1993）「大学生の大学進学動機と価値意識」『進路指導研究』日本キャリア教育学会、14、pp.1-7。
- マーティン・トロー〔天野郁夫・北村和之訳〕（1976）『高学歴社会の大学：エリートからマスへ』東京大学出版会、pp.63-64。
- 文部科学省「学校基本調査 -平成 26 年度（確定値）結果の概要-」（[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2014/12/19/1354124\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/12/19/1354124_1_1.pdf) 2015 年 7 月 8 日現在）